

この冷えすぎた日本をどうする

すでに経済時代は終わった

最近、経営者、サラリーマン、消費者に評判の悪い存在が二つある。一つは政府、もう一つは金融機関。ここでは金融機関は脇におくとして、政府に対する不満の第一は、どうも政府は精いっぱい努力してないではないか、ということ。第二は、政策のタイミングが、産業界から見ているとイライラするということではないか。こついつ不平不満をどうやらんになるか。

大平 まず、いつの時代でも、政府の評判がよかったことは稀です。それは日本ばかりでなく、世界的にそうであるようです。

政府はやるべきことをやっていないじゃないか、あるいは時期を失してはいはしないか、といわれます。政府もちゃんとしたタイムリーにやりたい。やりたいけれども、これをやったら事態がよくなるという確信がもてない。金を出せば景気がよくなるというが、金を出せばその金はそのまま銀行へ返ってくるんじゃないか、という銀行主義者の見方もある。金を出せば物価を吊り

上げて事態をさらに悪化させるんじゃないか、という通貨主義者の主張もある。金を出してやる以上、本来の意味で経済におしめりを与えて、活力を生み出すようなものにならないければ意味がない。しかし、やっていないわけじゃない。

第一に、歳入の欠陥をいわれながら今年の予算も忠実に実行している。公共事業にしても、住宅対策、公害対策にしても、下半期の分を繰り上げるべきものは繰り上げてやっている。やっていないものは何かというと、計画自体を改訂するとか、補正するとかは、やっていない。それはこんどの臨時国会での仕事だ。

たしかに、やっていることはやっているわけだが、これ以上ということになると、狭い選択の幅しか政府には残されていない。公定歩合を下げるということも預金金利の問題があるし、公共事業をやるということも歳入欠陥の問題がある。公定歩合も、もう一つ踏み越えて金利体系全体を動かすといったところまでは、なかなか踏み切れないわけです。

大平 いや、金利を下げて経済に刺激を与えることが、ただちに期待された成果を生むのであれば躊躇せずにやるんだが、そういう確信がもてないから、やれることを選択しながらやっているということですね。事態の診断もむずかしいけれども、使うべき政策手段が効果を発揮しない時期ですからね。

中・長期的に見ると、石油危機がこういふ事態を招いたのか、あるいは、たまたま高度成長から低成長への曲がり角へきたときに石油危機が起きて、こういふややこしい時代になったのか。そこからへんはどういふふうに踏まえて、これから政策運営をされていくおつもりですか。

大平 石油危機より、もっと原因は遠く深いんじゃないですか。要するに、第二次大戦後に限っていうと、世界経済がうまくいく条件をもっていた。通貨が安定し、新技術が開発され、その自由な交流が保証された。資源が安定的に、低廉に確保できた。輸送革命も行なわれて輸送のコストは非常に低廉になった。しかも日本の場合、とくに立地条件に恵まれていた。いろいろあって、経済は順調に成長し、生活程度は向上し、世の中は進歩し快適になるものである、と人々は思い込んでしまった。

ところが、それにはそうなるだけのいろいろな条件がたまたまあったわけです。しかしやがて、石油危機もその一つであるけれども、ドルが信認を失い、資源保有国のナシヨナリズムが火を噴き、技術の進歩は停滞する。そうして国際的な経済秩序が乱れてきて、いままで進歩を支えてきた条件が崩れてしまった。

経済というものは、もともと苦しい困難なものだと見るべきか、進歩していくものだと見るべきかという、ぼくは苦しいのは当たり前であって、むしろ、いままでが恵まれ過ぎていたと見

る。しかし、多くの人はまだそう見ていないようで、欲求不満が多いんじゃないか。

そこで、政府が頼りになる、あるいは頼らざるをえないわけだが、政府が強力なリーダーシップを発揮することの善し悪しは、いかがですか。

大平 私は、それは賛成できません。何となれば、政府が引つ張って行って、それに唯々諾々とついていくような国民は、たいしたことを成し遂げられないからです。政府に不満をもち、政府に抵抗もする民族であつて、はじめて本当に政府と一緒に苦勞して、次の時代をつくれるんじゃないでしょうか。いまは政府が先頭に立つて簡単に片づくような事態でないだけに、この泥濘の中でどうして進路を切り開いていくか、一緒に苦勞すべきだと思つう。

最近、だれの言葉だつたか、「山上山あり山幾層」、頂上を極めてみたら次にまた峨々たる山があるという山幾層。「波間道あり道縦横」、波のあいだに道なんかないと見えるけれども、本当は縦横に道があるんだという、そういう言葉を読んで、そのことを非常に感ずる。

いまのこの時代、不況の克服といつては、ある困難を克服すれば、また次の困難がくる。その困難は、なお峨々たる山で、いつそこの困難ではないか。坦々たる舗装されたハイウェイが用意されているなんてことは、考えられない。

高度成長の時代には、とにかく成長があつたから高福祉も追求できた。しかし、高度成長

が戻ってこず、しかも、おっしゃるように山あり山ありで、不確定な世の中になった。そういう中で、高成長＝高福祉というきわめて分かりやすい政治理念に代わるものは何が考えられるか。

大平　ちよつと飛躍するようで、あるいは乱暴な答になるかもしれないけれども、ぼくは、すでに経済時代が終わったんじゃないか、という感じがする。経済時代というのは、経済価値を至上とし、物質的に豊かであることが何より大事だと考え、経済的な福祉を追求することに一生懸命励んできた時代。そういう時代は、もう終わったんじゃないか。日本の国民は、数年前から、そんな状態からは大部分、抜け出てきたんじゃないか、という感じがする。

財産があるから尊敬する、とかいうものではなく、何か別のものを懂れている。学者とか芸術家とかが、比較的尊重されるようになってきているんじゃないだろうか。

文化というか……。

大平　うむ。それから、宗教時代がきたというか、ある信念、ある生き方を第一義的に考える。それへの献身に価値を感じるような。最近、質的なものを忘れた量的な拡大の追求に対しては、わたし自身ももう気が進まない。ブクブク肥った豚みたいになるより、少々痩せていてもソクラテスのほうがいいんじゃないか、というふうに感ずるんですよ。

そこで、福祉とは何ぞや、ということも、もう一ぺんここで見直さなきゃならないのじゃない

だろうか。いろいろな施設ができたならそれが福祉であると思うのは、とんでもない間違いないだろうか。いろいろな福祉制度ができることが幸せを約束するものでもないで、国民はそういうものに虚しいものを感じかけているんじゃないだろうか。もっと生き生きとした生きがいを求めかけているんじゃないだろうか。それは一体何だろうか、というようなことを感じているのではないだろうか。これから低成長経済にならざるをえない。そうすると、十分の財政的栄養を期待できない状態にならざるをえない。しかし、それでいて生きがいがある、という境を求めていかなきゃいけないんじゃないか。

こういふことができなくなったから、これはけしからんというのは自殺的なことであって、われわれはそこで、もっと工夫しようということにならざるをえないんで、また、そうすべきではないだろうか。

けれども、いままでせっかく先人がつくり上げた福祉制度がある。私は、それを無視しようとするわけじゃなくて、それは大事にしていく。しかし、それを第一義的なものと思っちゃいけない。そんなものが福祉の第一章を飾るものであるというような観念は、日本の名譽にならないと思う。

角度を変えて、いまの三木政治といわれるものをどう批評されるか。

大平 三木さんのやり方は、世論に敏感に政治が反応しているところとして。その限りにおいて理解もできるし、評価もできる。できるんだが、その取り組み方が私とちがうのだ。たとえば、最近の例でいうと、選挙法とか、政治資金規制法とかいう、政治の秩序にかかわるもの、それから独占禁止法という、経済の秩序にかかわるものに、三木さんは手を染めた。その着眼はいい。だけど、わたしは、これを本当にやるには、二年や三年の時間を藉してもらいたいと思う。秩序にかかわるものは、民法や刑法、あるいは商法のたった一部を改正するのでも、三年も四年もかかっているじゃないか。少しアプローチのしかたが性急過ぎる。

まず党と内閣が真剣に取り組む仕組みをつくることから始めてもらいたいと思うのだ。そういう点が性急過ぎやしないか。わたしだったら、もっとゆっくり取り組む。

第二は、対話と協調、とりわけ野党と対話と協調をすることを強調される。しかし、それは当たり前のことじゃないか。与野党が接近したから、対話と協調を急がなければならないというふうなことでは、あまり真面目な態度だとはいえない。三木さんは善意でやっていると思うけれども、本当は与党が強いつきこそ対話と協調をやらなければいけないのであって、それでこそ民主政治は成り立つ。そういう民主政治の基本があれば、保革が接近してきても、動ずることはない。便宜主義に流れないようにしてもらいたい。

あの人もベテランだから、そのくらいのことには心掛けておられるだろうが、やはり権力の座につき、責任者になってみれば、何か急いでやらなきゃならないという、性急さを覚えるのは無理ないから、あえて責めるつもりはないがね。

巷間いわれる、福田財政と大平財政のちがいについては、どう思われるか。

大平 福田氏の場合は、福田氏に経済観があるのかないのか、どういうものなのか、伺ったこともないので、わたしにはよく分からない。池田内閣時代に、彼は高度成長を批判して安定成長を唱えたけれども、ああいう立論はあまり感心できない。何となれば、成長と安定は本来両立しないんだ。安定成長というのは、要するに高度成長は困るということだろう。高度成長は困るということは、高度成長はいろいろなアンバランスを生むから困る、ということだろうと思うけれども、高度成長でアンバランスがなければ、高度成長結構じゃないでしょうか。低成長でアンバランスがひどければ、これもいただけないんじゃないだろうか。

だから、経済はバランスのとれた姿においてありたいということを、言おうとしているんだろうと思うけれども、そのあたりが明らかじゃない。しかし、彼がやったことも、結局、高度成長であった。だから、言葉のあや、がちがっていたというだけの話であって、それ以上明快な説明は聞いていないがね。

池田時代の福田経済観についての評価は分かるけれども、いま副総理としてやられていることについてはどうですか。

大平 いまは、高度成長を主張しようがしまいが、そういう条件がないんだから、高度成長はできない。高度成長ができない場合に、無理してやるべきでないし、またやれもしない。だからいま、わたしは高度成長論者であって、福田氏が低成長論者であるなんていうことは間違いで、そういうことはおかしいことである。高度成長を追求しようにも、その条件に恵まれていないので、もっとつましいやり方を考えなきゃならない。それは二人とも同じじゃないか。

経済というのは、与えられた条件の中で経済資源をベストに使わなければいけないし、それを国民に最高に還元できるような状態を考えなければいけない。だれが考えても、そういうことじゃないか。だから、そういうことのために努力をしていけばいい。

ただ、その条件はもうない……。

大平 いや、そんなことはない。たとえば石油にしても、いま瞬間風速でいうと、月二千万トンくらい輸入している。ずいぶん減った。減ったけれども、ではもっと輸入できないかというところ、できないはずはない。年間四億トン、あるいは五億トンが輸入できないはずはないと思います。わたしどもは、資源供給の条件は、物理的に窮屈になっているとは思わない。しかし、价格的には相当の

制約ですね。経済の問題を考える場合、やはり国際収支のバランスを考えなければいけないわけだから、これは、いまのわれわれの輸入力からすると、そんなに大きくはずれたものじゃない。

しかも、国内で公害だ立地だのと、いろいろ社会的制約がいま加わっているのだから、容易ならぬ事態だと思う。だから、いまの経済の規模からいくと、いまより相当大きく手足を伸ばしていかというと、わたしは、そんなに大きなブームはもうないような感じがする。

すると、大平さんは、仮りに首相になったら国民にこいつ希望を与えるというような旗はなかなか掲げにくい……。

大平 苦しむということがないと、本当の喜びはないし、苦しみ工夫がないと、本当の満足がないんじゃないか。これからのわれわれは、共に困難に立ち向かって、一緒に泣いたり苦しんだり憂えたりする、多彩な時代だ。だから、けっこう小説、芸能のテーマもありますし、いい文学は出るかもしれませんよ。だから、これからの時代は、案外いい時代かもしれない。

政治はどうですか。

大平 そういつときの政治だから、また、やりがいがあるわけです。もう「諸君、それがしは……」なんて演説して、型どおり選挙区を回って票をもらっていた時代とはちがうんだ。よほど工夫がいる。

しかし、それは大衆を相手の政治としては、まことに景気は悪い。ウケないでしょう。

大平 景気悪いことはないよ。大衆はうすぐような生きがいを感じるんじゃないか。

大平哲学はよく分かりますが、たとえば福祉の見直しの問題にしても、それだけいわれるような福祉に現実はずっていません。やはり高所得層だけが生活をエンジョイしているという問題。そういう社会の構成は、まだあるのではないか。

大平 日本は、世界的に見てそんなに貧富の差は激しくないと考えますし、大多数は中産階級ですよ。それでも、おっしゃるように、やはり経済の問題は切実な問題であって、また福祉の問題も、そう簡単に克服できるような問題ではない。もっと物質的な幸せも真面目に追求しないと、少し高踏的に過ぎやしないかということ、わたしも、おっしゃるとおりだと思つ。その点は、政治が足元の問題として真剣に、反省をもちながらやらなければならぬ。

ただ、それが第一義的なものでないということ併せて考えながら、次の時代の扉を開いてみようじゃないか。そこには、また、新しい光があるのじゃないだろうか。

（季刊・中央公論「昭和五〇年秋季特別号より転載。インタビュアーは

共同通信論説委員・内田健三、日本経済新聞論説委員・阪口昭の両氏）